

小蝶物語

野口雨情

●小蝶子之助の巻

春が暮れて夏が来まして、間もなく薔薇の花が散つて仕舞いしましたので、小蝶子之助は止むなく今度は夏草の白い小さい花の上へ移轉を致しました。

京ちゃんは今日々を朝早くから来まして、天道さまが這入つて終ふまで、小蝶子之助と遊び暮らすのが常でした。

さうする中に、夏草の花がそろそろ萎みかゝつたので、仕方なしに小蝶子之助は又々花から草の葉へ引移しました。京ちゃんは相不變平常の如に來ては遊んで居りましたが、月日過つのは早い

もんで夏も暮れて秋の初めとなりました。

丁度南風がノヨノヨ吹く秋の朝です。

『もう京ちゃんが来る時分だ』と獨言しながら

小蝶子之助は草の葉の上へお座りして京ちゃんの

來るのを待つて居りますと。間もなくガラ／＼

ツとお庭の柴折戸が開かつて。

『子之助居るの？』と京ちゃんの優しい聲が聞

こへしました。

子之助はお座りしたまゝ、『へー、居りますよ、

此處に居ります』と重ねて申しました。

『朝起きなこと。』と言ひ乍ら京ちゃんは元氣よ

く子之助の傍へ驅つて來ますと。

『お早やう坐います』と言つて、子之助は涙を

流して居りますので。

『お前、泣いてるのかい』と不思議さうに京ち

やんが聞きますると。

『いえ、泣きも何んにも仕ません。』と兩手で小さな目を隠しました。

『だつて泣いてるぢや無いか。』

『泣くんぢや有りませんが、南風が眼に泌みましてね。』

『南風？』

『は……』

『まア南風が眼に泌みるなんて何うしたんだらう。』と京ちゃんは心配さうに言ひました。

子之助は漸と顔を上げまして、京ちゃんの顔をつくぐ、眺め乍ら。

『京ちゃん、誠に濟みません。何卒來年も遊んで下さい。』



『來年も遊ぶつてお前、何處へか行くの？』

『はい今日限りで、もう他處へ行かなければ成りませんから、何卒忘れずに來年も遊んで下さいな。』と言ふや否や子之助は泣き俯伏して仕舞ひました。

『何處へ行くの、何處へ』とせき込んで京ちゃんが問ひしても

子之助は何んの應へもせず泣いて居ります。京ちゃんも茫然して立つて居りますと。

『こんなに南風が眼に泌みるやうに成りましては、何うしても私は他處へ行かなければなりませんから、明日からは京ちゃん一人で遊んで下さい。そして又來年の春になりませすれば

「お目に掛りますから子。」と、子之助は悲しさに申しまして、フト立ち上りました。

「さう、南風が眼に泌みるッて……秋の風が吹くんで……、ぢやか前他處へ行くッて死んで終ふことなの？」と京ちやんは初めて思ひ出したやうに、可哀想になつてハラ／＼と清しい眼から涙を落しました。

「はい、秋になりましたから神様のお定めに随つて私は死ななければ成りませんです。」と子之助も覺悟はして居りまして、矢つ張り淋しく思つたのでせう。サメ／＼と泣いて居ります。京ちやんも堪へ切れずに、袂を顔に當てて泣き出しました。

「京ちやん又來年の春逢ひますから、随分達者で居て下さい」と小さい聲が遠くに聞えますので

京ちやんは、ハツと思つて見ますと、もう小蝶子之助は居りません、京ちやんは驚いて。

「子之助！子之助！」と續げざまに呼びました。が何んの返事もありませんでした。

その明日も、その又明日も、子之助の行衛を探しました、遂々行方が知れなかつたのです。

京ちやんは永い月日を暮らして來年の春の來るのを心淋しく待つて居るでせう。小蝶子之助は秋の風に連れられて、神様のお側へ歸つて終つたのです。

(小蝶子之助の巻をばり)

吝嗇の誠

小島松之助

ドクトル、スピフト氏は第十七世紀の末に於ける英國知名の文學者にして、夫のガリバー、トラ